



### 〈西暦2000年における口腔衛生目標〉

1979年に開催された世界保健会議で西暦2000年までに各国が到達すべき保健上の目標を決議、採択した。参加加盟国は、各国が理想とすべきゴールを設定し、WHO（世界保健機関）がこれらのプログラムを調整するよう勧告し、各国が自分の国状に適したゴールをめざすよう決定した。WHOにより確立された全体的方針と、口腔衛生部門における方針やWHOとしての方策、機能、そしてFDIは特に西暦2000年までに到達すべき口腔衛生の目標に関しては全面的に承認している。WHO、FDI加盟国とも正式にこれらの目標や中間到達点を設定し、歯科医師がこれを達成できるよう一致協力していくよう希望している。そして世界的、地域的あるいは国家的レベルでの目標に基づいて、口腔衛生改善のための事業が企画されねばならない。

WHOは1981年5月に開催された世界保健会議で、最初の世界的口腔衛生状態の指標を採択したが、西暦2000年の時点で12才の児童が平均で永久歯のう蝕、欠損あるいは充填歯（DMF指数）を3歯以内とした。先進工業国と発展途上国ではう蝕罹患は反対の傾向にあり、作戦もこれに関連したものとせらる。DMF指数を世界的に達成することは、多くの発展途上国で増加しつつあるう蝕罹患率を現在より低くできるかどうかにかかっている。この世界的指標を手がかりにして各国が自国の状態、歯科医療従事者等の人的及びその他の資源により目標を設定することが望まれる。

毎年WHOの世界データバンクに各国がデータを送り、1980年での状況を基準として世界的な規

模で各国の改善状態を示すことになっている。特に世界的指標としてう蝕を用いるのは、国民の口腔衛生状態を間接的に示す指標として至適だからである。これはちょうど各国の保健状態を示す良い指標として乳幼児の死亡率が用いられるのと同様に、口腔保健状態の改善がDMF指数の低下となってあらわれるためである。

#### 提案された世界的に到達すべき目標

各国がそれぞれ目標を設定すると思われ更に改善された口腔衛生の指標が採用され、その指標が若年、中年、老年層を対象とするよう提案された。西暦2000年に到達すべき世界的目標は以下のようものである。

- ゴール1 5～6才児の50%にう蝕がないこと。
- ゴール2 12才で世界的平均で3 DMF指数以下であること。
- ゴール3 18才の85%が全永久歯を持っていること。
- ゴール4 36～44才代の無歯顎者の率を現在のレベルより50%減らすこと。
- ゴール5 65才での無歯顎者の率を現在のレベルより25%減らすこと。
- ゴール6 口腔衛生状態の変化を監視するための基本データ・システムを確立すること。

ゴール1. 5～6才児の50%にう蝕がない  
最近収集したデータによれば先進工業国の5～6才の児童の無う蝕率は10～50%の間であり、発展途上国では30～91%である。しかし先進工業国の無う蝕率は増加の傾向にあるが、発展途上国では減少傾向にある。この目標には到達可能である。

というのは先進工業国では、う蝕予防のための材料の入手あるいは使用が可能であり、すでにう蝕の無い子供のパーセンテージは増加しつつあり、う蝕罹患率も減少傾向にあるので、最終目標のゴールに到達できる。発展途上国ではう蝕罹患率が増加しつつあり、一般水準以下にさがっているというデータも有るが、何らかのう蝕予防法が採用されれば、50%レベルにもって行けるであろう。最良の方法としては親達のグループに食事の大切さと、妊婦に対してう蝕予防法を採用し納得させることが目標を達成する上で重要である。

#### ゴール2. 12才で世界的平均3 DMF 指数以下とすること

WHOのデータバンクによれば58の発展途上国および7の先進工業国では12才で3 DMF 以下であり、32の発展途上国および21の先進工業国で3 DMF 以上であると報告されている。また、11の発展途上国ではう蝕罹患率が減少しているので3 DMF 以下になるだろうといわれているが、16の発展途上国では依然う蝕罹患率が増加しつつあり、このレベルに達することが危ぶまれている。以上を総括すると種々のう蝕予防プログラムを採用することにより、ある国家グループでは増加、あるいは減少傾向にあっても世界的レベルでこの段階に持っていくことは可能である。

#### ゴール3. 18才代の85%が全永久歯を持っていること

現時点ではこの目標を達成できるとは限らないが、全ての国がこれを基本データとして用いることは最良であり、実現可能な目標でもある。さらにこの年代者でも、若年者グループのう蝕罹患率と同じであることが最終目標である。また口腔清掃状態が向上しかつ適正に保たれば歯周疾患も減少する。それにはまずゴール1の達成に役立つ予防法がこのゴールに至る上に最も効果があるであろう。さらにう蝕の早期診断、治療を行うことが永久歯喪失を防止することにつながる。そしてこの年代には、個人がう蝕や歯周疾患の予防と口腔清掃状態を最良に保つための効果的知識を持つ

ことが最も大切である。

#### ゴール4. 35~44才の無歯顎者の率で現在のレベルの50%減を達成すること

言葉を代えれば、35~44才で90%の人が有歯顎者で、少なくともその内75%の人が咀嚼可能な歯が20本は存在するというレベルである。12の発展途上国の内わずか1カ国が35~44才での無歯顎者の率が1~28%である。無歯顎者に関するデータの収集は困難であるが、若年時のう蝕が無歯顎になる時期を早めることに一致することは確かである。この年代の人々には進行しつつある歯周組織の破壊を防止するよう戦い続けることが大切である。そのためには個々に合った正しい口腔清掃法を専門家が指導すべきであるということは種々の研究結果が示している。

#### ゴール5. 65才での無歯顎者の率で現在のレベルの25%減を達成すること

各国が65才以上の人の無歯顎者の率を25%減少させること、さらに50%の人々には咀嚼可能な歯が20本は残存していることを目標にしている。この年代での無歯顎者率が28~80%の国はたった8カ国にすぎないというデータがある。他の年齢層に対する口腔清掃法の発達と疾病予防法の拡大が口腔保健の状態に理想的な変革をもたらすであろう。もし口腔清掃状態が改善されれば、口腔を原因とした敗血症や、顔面の痛みが起こることが減少し、老人の生活状態の飛躍的な質的向上に繋がるであろう。

#### ゴール6. 口腔衛生状態の変化を監視するための基本データを確立する

これは今まで述べてきたものとは異なり、総合的なもので、口腔衛生を保つために関連する種々の因子を検討し、新しい方法確立に役立つものである。このため現時点では児童のう蝕の状態、歯周組織の状態、無歯顎者の率を調べることになるが、それだけでは不十分で最終的には世界的にデータを収集し西歴2000年の口腔状態を分析することである。(FDI Newsletter, No. 122, March 1982)